

注解『七十一番職人歌合』稿(二十一)

下房俊一

凡例

一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、第四十五番および第四十六番の注解を収めた。

四十五番 鞆巻切 鞍細工

【職人尽】

【誹諧職人尽】鞆巻切 風さそふ梅の小だちに鞆もなし(益光) 永き日は鞆つき詰めの刀かな(春可) 節餅やこがね作りの鞆巻師(志友) 恋口のあふ夜も更くる師走かな(寥和) / くら細工 秋山や物も揺るがぬ鞍の上(キ角) 荷鞍踏む春の雀や縁の先(土芳) 桜山目に付けて居ん鞍細工(葉五) 春の日や伊勢の馳走のくら皆具(雪麿) 響応の鞍馬は国々の諸士より結構を尽くさる 高麗人にもてなしぐらや金銀花(寥和) 【職人尽発句合】三十一番右 鞍作 こうろぎを取つて伏せたり鞍の上 取つて伏せたりとゆゆしく続けたるは、長井の別当が昔の面影も添ひて、天晴手がらといふべけれど、鞆のはづみ(鞆くくりの歌) も亦おもしろし。 【略画職人尽】雲雀毛の三春の駒やひきぬらん霞色そふ紫手綱

【本文】

四十五番

うき雲のはれもやらねはさやまきの

ひきこみかちに見ゆるつき哉

夕まくれやまかたちかき三日月の

まかりなからにいりぬへきかな

左は、いさゝかされ哥に似たり。右は、ことは

つゞきやさし。可為勝。

我こひはまちさやまきのやれすのこ

ぬるひとのこぬ身をいかにせむ

いかにしてまつ人くちにのりぬらむ

しらはねくらのぬる夜なき身に

左右、たくみにて、哥さま猶狂哥也。ともに、

うるしほし気なり。可為持歎。



さやまきゝり

當時はやらて、

得分もなき

細工かな。



うき雲のはれも〔類〕浮雲の晴も さやまき〔類〕さや巻
ひきこみかちに見ゆる〔類〕引こみかちにみゆる つき〔明〕
〔類〕月
やまかたちかき〔類〕山かた近き
いりぬへきかな〔類〕入ぬへきかな
され哥〔類〕され歌

我こひ〔類〕我恋 まちさやまき〔類〕まちさや巻

ひと〔明〕〔類〕人 いかにせむ〔明〕〔類〕いかにせん

まつ〔忠〕〔明〕先 のりぬらむ〔類〕乗ぬらん

しらはねくら〔類〕しらはね鞍 夜〔類〕よ

哥さま〔白〕哥さま 狂哥也〔類〕狂歌なり

さやまきゝり〔白〕〔類〕鞘巻きり〔忠〕
四十五番 鞘巻きり

かな〔白〕〔忠〕哉

くらさいく

あら、ほね

おれや。

くらさいくー〔白〕類〔鞍細工〕〔忠〕鞍細工
ほねおれやー〔白〕ほねおれ〔明〕ほねおり

【語注】

◎鞘巻は、腰刀の一種で、鐔のない短刀。古くは、鞘に葛藤の蔓などを巻きつけたが、中世には、蔓を巻いた形に、鞘に斜めの刻み目をつけて漆を塗るようになった。鞘巻切は、鞘に刻み目をつけて鞘巻を作る職人。

鞍は、狭義では、鞍橋〔骨〕（人が乗るために馬の背に固定する装置）のこと。広義では、馬具の総称。鞍細工は、狭義の鞍を作る職人であろう。

◎つき雲のはれもやらねは 月を覆っている浮雲が晴れきらないので。

◎ひきこみかちに見ゆるつき哉 「ひきこみ」は鞘巻の縁語か。未考。新大系は、「刀の鞘の上覆い」とする。

〔鞘巻の？〕引き込み」から、「引き込みがちに」と続く。月が雲に隠れがちであることをいう。ただし、月が「引き込む」という言い方は、歌に用いないばかりか、散文でも異例。

◎やまかたちかき三日月 「やまかた」は、「山方」で、山の端とほぼ同様の意で用いていると思われるが、実は、歌ではほとんど用いない言葉。ここは、「鞍」の縁語「山形」に言い掛けるため、あえて無理をしたのである。「山形」は、鞍橋の前輪まえわと後輪しうわの上縁部。中央が高くなっている。「三日月」も「鞍」の縁語か。『新大系』は、山形の一種に「三日月形」があるという。

◎まかりなからにいりぬへきかな 「曲がり」に、馬の手綱の中ほどの「曲」を掛けるか。「曲がる」は、「直き木に曲がれる枝もあるものを毛を吹き疵をいふがわりなさ〳高津内親王〵」（後撰集十六、雑二）のように、木や枝についていう以外、歌にはほとんど用いない言葉。今にも三日月が山の端に、曲がったままの形で入ってしまうに違いない、と戯れたのである。

◎左は、いさゝかされ哥に似たり。右は、ことはつゝきやさし「ざれ歌」は、ふざけた歌。数は少ないが、「左は、花に向かひていざさらばといひ、右は、山風をなにとこのといへるころ、ともにざれ歌の心なるべし」(千五百番歌合、百七十四番判詞)のように、判詞に用いた例がある。「ことば続き」は、言葉の続き具合。「上句、詞続きはあしくも見え侍らず」(六百番歌合、恋二、二十七番判詞)、「心はありて、ことは続きよろしからず聞こえ侍り」(千五百番歌合、六十一番判詞)、「右歌、ことば続きやさしく侍り」(院四十五番歌合、二十三番判詞)など、判詞にしはしば用いられる。「やさし」は、歌論用語で、女性的な優美、繊細な感情や情趣についていう(和歌大辞典「やさし」の項)。左歌がざれ歌だというのは、「鞘巻の引き込みがちに」あたりの表現について言うのである。うが、右歌の「三日月の曲がりながらに」も、それに類する破格の表現であり、その右歌を、ことさら「ことば続きやさし」という理由はない。勿論冗談である。

◎我こひは…… 「我が恋は……」という形式は、恋の歌の典型の一。五番語注「わが恋は」の項参照。

◎まちさやまき 「待ち鞘巻」で、詠え物に対して、出来合いの鞘巻をいうのであろう。二十番語注「町かふと」の項参照。

◎やれすのこ 「破れ簀子」か。未考。『新大系』は、「鞘につけた刻み目が簀子状に見えるのであろう」とする。

◎ぬるひとのこぬ身をいかにせむ 待ち鞘巻だから、買手がついてから漆を塗るのか。未考。いずれにしても、「塗る」に「寝る」を掛ける。漆を「塗る」と「寝る」との掛詞は、伝統的な歌では異例だが、本職人歌合では、三番右、塗師の月の歌「ながむとてぬる夜もなきにあら漆」などの例がある。鞍細工の恋の歌「白橋鞍のぬる夜なき身に」も同様(二番語注「ぬる夜なくてそ」、三番語注「ぬる夜もなきに」の項参照)。「身」は刀身の意の「身」に通じ、鞘巻の縁語。共寝する人の来ない我が身をどうしよう。

◎いかにしてまつ人くちにのりぬらむ 「人口に乗る」は、人の噂になること。「めでたき歌とて、世の人口に乗りて申すめるは」(宇治拾遺物語一・一〇)などの例がある。勿論、雅語ではないが、「鞍」の縁語「一口」(鞍・轡などを数えるのに用いる)を掛け、「乗る」を言うため、あえて用いたのである。どうして、(共寝もしていない)

先に、人の噂になったのだろう。

◎しらはねくら 「いかにして……乗りぬらむ知ら(ず)」から「白橋〔骨〕鞍」と続く。「白橋〔骨〕鞍」は、白木のままで、漆を塗っていない鞍。『岡本記』に、「鞍のしらはねも、そうじて乗るまじき事也。すべて、あかうるしさへも、略儀にてわろし。ただ黒くぬるべし」とあり、略儀に用いる鞍であったらしい。

◎ぬる夜なき身に 「ぬる」に、「塗る」と「寝る」とを掛ける。漆を「塗る」ことのない白骨鞍のように、恋しい人と「寝る」夜のない我が身なのに。

◎哥さま猶狂哥也 「哥さま」は、白石本は「哥さま」と読めるが、誤写であろう。「狂歌」は、月の歌の判詞の「ざれ歌」と同じく、ふざけた歌。ただし、歌合判詞では、「左歌、くぢらとらんこそ、万葉集にぞあるやうに覚え侍れど、さやうの狂歌体の歌共多く侍る中に侍るにや」(六百番歌合、恋七、七番判詞)とある他、例を見ない。◎ともに、うるしほし気なり 左右の歌ともに、「寝る」と漆を「塗る」とを掛詞に用いているので、いかにも漆が欲しそうだ、と茶化したのである。

◎当時はやらて、得分もなき細工かな 「当時」は、今現在。今日。「得分」は、利益。もうけ。鞘巻の流行の頂点は鎌倉時代で、室町時代には衰えた、という(『日本職人辞典』「鞘巻師」の項)。

◎あら、ほねおれや 「ほねおれや」は、白石本「ほねおれ」、明暦板本「ほねおり」。いずれも、意味は通じぬことはないが、やや不自然な表現。誤写であろう。「鞍橋〔骨〕の「橋〔骨〕」に掛けた洒落か。

【絵】

鞘巻切は、烏帽子を着、諸肌脱ぎで袴を履き、鞘巻の鞘を持って、出来具合を改めている様子。前に、弓鋸、小刀、刻み目を入れた鞘・柄、まだ刻み目を入れていない鞘。棒状の物は未考。明暦板本の烏帽子は菱烏帽子のように見える。尊経閣本、忠寄本、明暦板本、類従本は、木の削り滓を描く。白石本、明暦板本は、前の鞘巻などの描き方に、それぞれ小異。

鞍細工は、剃髪し、直垂、袴姿で、右手に手斧、左手に前輪か後輪かを持つ。前に、前輪または後輪二つ、居木(鞍橋の中心で尻を乗せる部分)用の板二枚。尊經閣本、白石本、忠寄本、明曆板本、類徒本は、木の削り滓を描く。明曆板本は、有髪で烏帽子を着る他、絵全体に小異。

【参考】

○畠山六郎殿のさいたる太刀にこそな、千両斗りの金はかかりたり、刀には二おう三郎、太刀にわ備前兼光、六郎殿の剃刀はゑそのつきおれ
(田植草紙)

○われらの鞍の鞍骨は、前方がすべて塞がっている。日本のは、それにしがみつけるよう穴があいている。

(日本覚書、八)

○われらの〔鞍?〕は、革や毛織物製である。彼らのは、木と漆製である。

(同)

四十六番 暮露 通事

【職人尽】

【誹諧職人尽】暮露 通事 かげろふや虚無僧通る窓の前へ広濠斎 寸龍▽ こも僧の若き姿や竹の春へ尺子▽ 虚無僧の

浮世は風の柳哉へ芦雪▽ 巢籠もりや訴ふがごとく山桜へ和圭▽ 紫陽花や白も浅黄も暮路の伊達へ女 可代▽ 寺を出て

こも僧一人山桜へ寥和▽ 唐歌に花咲かせけり倭仮名へ桃兆▽ 鶯の歌に昔の通事哉へ文尺▽ 紅毛に口動かすや江戸鑑へ

白抄▽ 夏旅や象に通事の阿り事へ寥和▽ 【職人尽発句合】六十二番右 梵論 ほろほると吹くや夕立の雲の脚 名取山

の夏木立(角力の句)に、丈高く、ほろほろ降りかかる雨の脚に題を結びとめし自在は、俳諧の天耳天眼の通力にして、滑

稽の詞、不窮竭妙義なるべし。猶、名取山、力まさりて勝つべくや。【職人尽狂歌合】左 暮露 降り積もる色をし見れば
白梵字暮露も文読む雪のつれづれ 左、昔、色をし、しら梵字といへるぼろの、さしたるかたきにて、宿河原といへる所に
て、貫き合ひて死にける事、つれづれ草に記してあり。それ取り出でてあやなされし。おもしろく聞こえて侍り。……これ
も左勝ち侍りなん。 / 右 梵論 雪折れの竹の音する梵論が家も御無用といふ庭の足跡 右、雪折れの竹の音おかし
きうへ、跡つくるを無用と申されし作意なべてならざれば、またき勝と申すべし。 / 左 暮露 かかる時恋慕流しをふ
け禅師女ともなる雪に見とれて 左、ぼろも僧形なれば、戒をたもつ心なるべし。右、……勝つべくや。 / 右 暮露
向かひ路の高根の雪にこも僧のおのが軒端に手を吹きて見る 右、初句もぼろに縁あり。結句もめづらしければ、勝とす。
【職人尽狂歌合】通事・同 唐倭通事が門に降る雪をかいて教ふる道の案内 ふみ見つる鳥の跡さへ絶えはてて更に通事
も困る大雪 左右ともに、けしうは侍らず。いみじくたくまれたり。但し、右、ふみ見つる鳥とは、いささか続きがらいか
がに侍れば、左勝つべくやと覚へて侍れど、かいて教ふるなど申されし、雪をめづる心うすきやうに聞こえて侍れば、ひと
しく持となして、勝負を分かつ侍り。 / 左 通事 唐言を人に通じも我が門の口を閉ぢむるけふの大雪 左、口を閉
ぢめたる、おかし。……持と申すべからん。

【本文】

四十六番

法の月ひろくすましてむさし野に

おきゐる暮露の草の床かな

すみよしのいり江の月やふるさとの

姑蘇城外のあきのおも影

暮露の心月、いかはかりの法の光をか

ひろめ侍へき。信仰もなく覚ゆ。右、住の

ひろくー〔類〕広く むさし野ー〔類〕武蔵の
おきゐるー〔類〕起ゐる かなー〔類〕哉
すみよしのいり江ー〔類〕住吉の入江 ふるさとー〔類〕故郷
おも影ー〔類〕おもかけ
いかはかりー〔類〕いか許
ひろめー〔類〕広め

江の月に対して、名たかき楓橋のわた
りをも、わか故郷といひ出たる所、他人の
をよはさる風躰、彼仲磨か三笠の山の
月にもすみまさりてこそ侍らめ。

いとふなよかよふころのむまひしり
人のきくへきあのをともなし

からやまとしるへする身のかひそなき
おもふ中にはことかよはさて

右は、たよのつねのことはりきこえたる
のみ也。左の馬ひしりは、あのをとせず
ゆかむ駒もか、といへる万葉の古風もよ
りきたりて、神妙に侍り。尤可為勝。

◇

◇

暮露

通事



名たかき〔類〕名高き

わか〔類〕我 いひ出たる〔白〕いひ出たり〔類〕云出たる
彼〔明〕〔類〕かの

すみまさりて〔類〕澄増りて

ころ〔類〕心

きくへき〔類〕聞へき をと〔類〕音

からやまと〔類〕唐大和 身〔類〕み

おもふ〔類〕思ふ こと〔類〕言

たよ〔類〕只 つね〔類〕常 きこえたる〔類〕聞えたる

馬ひしり〔類〕馬聖 をと〔類〕音

ゆかむ〔類〕ゆかん

暮露〔白〕暴露〔忠〕四十六番暮露

【語注】

◎暮露は、「梵論」などの字も宛て、「ぼろぼろ」、「ぼろんじ」ともいう。その語源は、『新大系』付録によれば、彼らが一字金輪呪「ポロン」を連続して誦したことによるのであろう、という。鎌倉末ごろに現れた乞食僧で、近世には虚無僧と同一視された。実態は明らかではないが、『徒然草』百十五段に、宿河原というところに暮露が多く集まって、九品の念仏をしたこと、そのとき、二人の暮露が決闘して刺し違えたことを述べ、「世を捨てたるに似て我執深く、仏道を願ふに似て鬪争をこととす。放逸無慙の有様なれども、死を軽くして少しもなづまざる方のいさぎよく」と評している。寛永・正保ころの刊本『ぼろぼろのさうし』（仮題）に見える暮露は、髪は空さまに生い上がり、絵描き紙衣、黒袴を着、一尺五寸の高足駄を履いて、一尺八寸の打刀を差し、蛭巻の八角棒を持ち、三十人の暮露を引き具して、女を伴って、諸国行脚している。また、五逆十悪、三宝誹謗の者を見ては、我が敵なりと思ひて、打ち殺し、捨てたという。踊り念仏の徒とは、ことに対立していたようである。なお、原田正俊氏は、『天狗草紙』伝三井寺巻に描かれる自然居士の党類の一人電光は、蛭巻棒をかつき、紙衣を着、高足駄を履いており、この電光こそ暮露なのである、とされる（『放下僧・暮露はらにみる中世禅宗と民衆』（『ヒストリア』一二九号）。

通事は、「通詞」、「通辞」などの字も宛てる。通訳のこと。本職人歌合の月の歌では、中国人という設定。暮露と通事は、前者が真言を唱えたとすれば、後者も外国語を話す関係で番われたか。

◎法の月ひろくすまして 「法の月」は、煩惱を照らす仏法を、夜を照らす月に譬えた言葉。多くはないが、「法の月久しくもがなと思へどもさ夜ふけにけり光隠しつ△行基▽」（新勅撰集十、釈教歌）のような例がある。本職人歌合六十五番、法花宗の月の歌にも、「我法の月ぞ照らさむ」云々とある。「広く」は、次の「武蔵野」の縁語。法の月の清らかな光を広く世間に行き渡らせて。

◎むさし野におきゐる暮露 「武蔵野」は歌枕であるが、諸国を行脚していたらしい暮露が、京都から遠い武蔵野で野宿することは、ありそうなことと思われたであろう。なお、『徒然草』百十五段に見える「宿河原」について、武蔵国橘樹郡稲田村の宿河原（現川崎市多摩区宿河原）を宛てる説がある。「起きゐる」は、夜寝ないで起きてい

ること。「なよ竹のよ長きうへに初霜のおきるて物を思ふころかな八忠房」(古今集十八、雑歌下)、「露ならぬ我が身と思へど秋の夜をかくこそあかせおきながらに八師輔」(後撰集六、秋中)などのように、露などが「置きめる」意と掛け、秋の長夜を寝ずに過ごす意で用いられることが多い。これも、「暮露」の「露」字から、草葉に置く露を連想し、それと同じく、秋の武蔵野に起きいる暮露、といったのである。

◎草の床 草を床とする、つまり、野宿することをいうのであろうが、鹿の寝床を詠んだ「契りしはさ山が月に鹿ぞ鳴く妻なき草の床のあらしに」(草根集)以外、前例を見ない言葉。

◎すみよしのいり江 「住吉」は、もと「すみのみえ」と称したが、平安初期以降、「すみよし」とも称されるようになった。判詞には「住の江」とある。現大阪市住吉区一帯。古くは、住吉神社のすぐ近くまで海であった。「住吉」は古来の歌枕であるとともに、応仁乱後、遣明船の発着地となっていた堺に近く、通事の歌に詠み込むのにふさわしい地である。

◎ふるさとの姑蘇城外のあきのおも影 『三体詩』所収、張継「楓橋夜泊」詩、「月落烏啼霜滿二天、江楓漁火對二愁眠、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到二客船」による。「姑蘇城」は、今の蘇州。春秋時代、呉王夫差の宮殿、姑蘇台があった。「故郷」は、生まれ育った地の意に取るのが自然であらう。すなわち、この通事は中国人という設定で、住吉の入江の月が、姑蘇城外の秋の風情を思い起こさせる、というのであろう。

◎暮露の心月、いかはかりの法の光をかひろめ侍へき 「心月」は、仏教語で、月のように澄みきった心。歌に「法の月」と言ったことに対応する。「法の光」は、仏法を光に譬えた言葉。暮露風情の心月など、どれほどの法の光を広めることができようか、というのである。暮露がまっとうな宗教者と考えられていなかったから、こう言うのであろう。

◎信仰もなく覚ゆ 「信仰」は、元和三年板『下学集』に「信仰シンガウ」、明応五年本節用集に「信仰シンガウ」とあるなど、中世辞書は多く「しんがう」とするが、静嘉堂文庫本『運歩色葉集』には「信仰」とし、日葡辞書は、「Xingō」、「Xingō」両形を挙げる。「信仰なし」はありがた味がないことか。

◎住の江の月に対して、名たかき楓橋のわたりをも、わか故郷といひ出たる所 「対して」は、向かって。「いひ出たる」は、白石本は「いひ出たり」とあるが、誤写であろう。「楓橋」は、前掲張継の詩で有名な、蘇州の西の橋にあり、

◎風躰 「ふうてい」または「ふうたい」と読む。歌論用語で、一首の形態あるいは様式、また一首の総体的な印象（有吉保『和歌文学辞典』『風体』の項）。

◎彼仲麿か三笠の山の月にもすみまさりてこそ侍らめ 「仲麿か三笠の山の月」は、遣唐使阿倍仲麿が、帰国に際して、「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」という歌を詠んだという故事（古今集、九、羈旅歌）による。同様の説話が『今昔物語集』二十四などにも見える。「澄みまさり」は、月が澄み増えることに掛けて、通事の歌が仲麿の歌より勝っていることをいう。

◎かよふころのむまひしり 「通ふ心」から「心の馬」、「馬聖」と続く。「心の馬」は、仏語「意馬」の訓読。煩惱・欲情の抑えがたいことを、馬が暴れるさまに譬えていう。ただし、「とどめえぬ心の馬の綱引きに立つ名は早き恋の道かな（忠定）」（宝治百首、恋）などの例がないが、歌にはほとんど用いない言葉。「馬聖」は暮露の蔑称か。未考。

◎人のきくへきあのをともなし 判詞にいうとおり、万葉集の「足の音せず行かむ駒もが葛飾かづかの真間の継ぎ橋止まらず通はむ」（万葉集十四、東歌）を引く。「足の音」は足音。万葉集では、女の許に忍んで通うために、足音をさせずに行く駒が欲しい、というのであるが、ここは、馬ならぬ馬聖みずからが、足音をさせず歩いて通う、というのである。本物の馬ではないのだから、派手な足音のしないのは当然である。（私は馬聖なんて妙な名前と呼ばれているけれど、）人の聞き咎めるような派手な音は立てない（から、厭うてくれるな）。

◎からやまとしるへする身のかひそなき 唐と大和、つまり、中国と日本との手引きをする身でありながら、その甲斐のないことだ、というのである。

◎おもふ中にはことかよはさて 「言（を）通はず」は、言葉を通わずこと。また、そうすることによって思いを

通じさせること。ただし、「言・通ふ（自動詞）」は、「心ぐく思ほゆるかも春霞たなびくときに言の通へば（家持）」（万葉集四、相聞）など、万葉集に見え、平安朝以降の歌にもまま用いられるのに対して、「言（を）・通はず（他動詞）」は、もっぱら散文でしか用いられない。にもかかわらず、ここで「言通はず」を用いたのは、ひとえに、通事という職能に強引に言い寄せるためである。（唐大和の間さ言葉を通じさせる身でありながら、）恋人との間では話す機会もない、または、話しても心が通じないで。

◎たよのつねのことはりきこえたるのみ也 「世の常」は、世にありふれた平凡なこと。「左歌、よのつねのことなりとて、右勝つべしと定まり侍りぬ」（文治二年歌合、恋八番判詞）、「左はわりなき風情をもとめ、右は世のつねの霰の音を詠まれて侍れど」（千五百番歌合、八百七十七番判詞）など、判詞にまま用いられる。通り一遍の理屈に合っているだけだ、というのである。

◎万葉の古風 「古風」は、歌論用語で、表現や素材が古風なこと。いい意味で使うことが多い。「右、柿本古風を思へり」（建仁元年撰歌合、四十二番判詞）、「万葉集古風を存ぜられたり」（千五百番歌合、千五十六番判詞）など、歌合判詞にしばしば用いられる。

◎神妙に侍り 「神妙」は、「しんべう」または「しんめう」。非常に優れているさまで、「右の忘水、此の心いままでも読み残し侍らじかし。されど、老耄のあひだ、さしてえ覚え侍らず。かかる古事なくは神妙に侍るべし」（六百番歌合、恋三、十一番判詞）、「右歌、始め終はりあひかなひて、ことに神妙に見たまふれば」（千五百番歌合、千二百八十六番判詞）のように、歌合判詞にまま用いられる。なお、「忠岑十体」や「和歌十体」の一つに「神妙体」があり、超自然的な靈妙なことにかかわる優れた歌体を言うらしい（和歌大辞典「神妙体」の項）が、ここは一般的な意味と見てよかるう。いずれにせよ、伝統的な歌合判詞をまねた表現。

◎喜露 白石本は「暴露」と誤り、忠寄本は、「暴露」の「暴」の右に、「暮」と校合する。

【絵】

暮露は、無帽で髪を束ね、鉢巻をし、白い小袖に黒い袴を履き、腰刀を差す。横に、長柄の傘と足駄。
通事は、中国風の帽子と服。

【参考】

○王、^{して}しやあふうを云テ、つうじを呼ぶ。つうじ出て、しやあふうト答ゆる也。日本人出て、お暇を下されいと云事ヲつうじに云。心得タト云テ、王に云也。いづれも唐言也。
(天理本狂言「唐相撲」)

○これはこの辺りで人の御存じの者でござる。某さる仔細あつて唐土の通詞を一人抱へてござるが、当所では何も致させう業がござらぬによつて、某牛馬を数多持つてござる故、秣を申しつけて刈らせまするが、……

(鷲賢通本狂言「唐人子宝」)

○かの虚空坊が丈は七尺八寸、力は六十五人が力、絵描き紙衣に黒袴着て、一尺八寸の打刀を差し、蛭巻の八角棒を横たへ、一尺五寸の高足駄を履きけり。同じやうなるぼろぼろ卅人引き具して諸国を行脚するに、見聞く人恐れ、かりそめにも行き合はんといふ者なし。
(仮題「ぼろぼろのさうし」)